津田梅子の生き方（5）～ランマン家での生活～

ランマン夫妻
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

ランマン家でチャールズとアデラインは、梅子をまるで我が子のように大切に育てました。ランマン宅から通うことのできる私立の小学校スティーブンソン・セミナリーで学んだ梅子は、中等学校であるアーチャー・インスティチュートへと進学しました。梅子は、小学校も中等学校でも大変優秀な生徒でした。特に理科系の学科は群を抜いて優れており、全ての勉強の基礎となる英語力についても、もはやネイティブの水準まで達していました。

梅子がまだ7歳だった時に書いた、「小さい女の子の物語」と題した冊子が津田梅子資料室に残っています。当時はまだ 9 ヶ月しか英語を学んでいないのに、日本からアメリカまで自身が経験した大旅行について、アメリカ号（船）やサンフランシスコで宿泊したホテルの絵とともに、絵日記風に構成された冊子になっています。冒頭には、この物語は自ら作ったものであること、ランマン夫妻に見せたら驚いていたという旨の記述もあるそうです。

女学校時代の梅子
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

学校が夏休みの時期になると、ランマン夫妻は、梅子を連れていろいろなところに旅行に行きました。アメリカ北東部の都市や町、さらにカナダにも行っています。梅子は、自然が豊かな山や海、湖、島などにも出かけることができました。1876 年には、ランマン夫妻は、捨松や繁子も誘って、梅子にアメリカ独立 100 周年を記念したフィラデルフィアでの万国博覧会を見学させるなどの貴重な体験をさせてくれました。また、アデラインだけでなく、チャールズもまた梅子の教育・子育てに深く関わりました。梅子の学校での出来事を著名な詩人に手紙を書いて知らせたり、作文の課題を与えて書く訓練をさせたり、旅行中には絵の手ほどきをしたりもしました。梅子が可愛がっていた「ネッコ」という名前の猫がいなくなった際には、似通った猫をニューヨークから取り寄せた、というエピソードからも、ランマン夫妻の梅子への深い愛情が感じられます。

アメリカで梅子が体験した、子どもを中心として、夫婦が互いに尊重しあう愛情いっぱいの家族の形。温かなランマン家で過ごしたおよそ 11 年という時間が、梅子のその後の人生に大きな影響を与えることになりました。

また梅子は、1873 年の7月に、ペンシルバニア州フィラデルフィアのオールドスウィーズ教会でキリスト教の洗礼を受けています。洗礼を執り行ったペリンチーフ牧師は、チャールズの友人であり、女子教育も含んだ日本の教育について森有礼に助言を与えていた人物でした。そんなペリンチーフ牧師が、宗派に属さない形式で梅子の洗礼を執り行ないました。この洗礼は、梅子が自ら望んで受けたものでした。日本でキリスト教禁止が解除されたのは同年の 2 月のことでしたが、梅子は洗礼を受ける前から、ランマン夫妻に連れられて毎週、教会の日曜学校に通っていました。自らキリスト教徒になることを望むような環境にあったのです。

梅子ら 3 人の留学生は、約束の 10 年が切れる少し前 1881（明治 14）年の春に「帰国するように」という日本政府からの指令が出ました。繁子は、同年 6 月にヴァッサー大学音楽科を卒業し、指示通り、同年秋に帰国しました。

捨松と梅子とは卒業まであと 1 年ということで、留学期間延長を日本政府に願い出て、それが許可されました。

こうして梅子は、アーチャー・インスティチュートを優秀な成績で無事に卒業することができました。

なお、当時女子留学生達にアメリカで支給されていたお金は年額千円でした。これは、日本においては高級官吏の年俸に相当するものでした。為替の問題はあれど、これは政府が女子留学生派遣をいかに重視していたのかを示すとともに、留学生が受け入れ先で丁重に受け入れられる後ろ盾にもなっていたのです。